

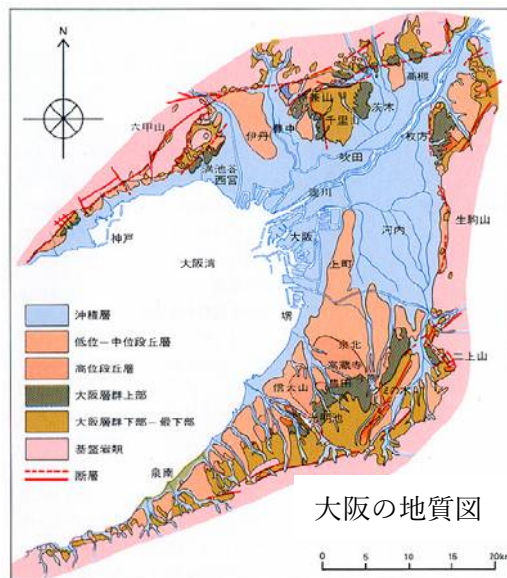
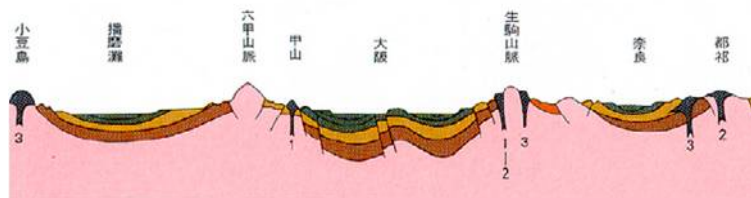
大阪層群と須恵器窯について

メモ鉄本 (2022.06.14)

須恵器に関連して来館者から、「この辺りでは、良質の粘土が採れるのですか」という質問がよくあります。この質問に対する答えの1つとしてまとめます。

1. 大阪層群

大阪盆地には、約300万年前から約数十年前にかけて、堆積した淡水成地層群があり、約700mの深さまで存在する。大阪層群は、火山灰層によって3つに区分され、大部分の層は非海成のものだが、12枚の海成粘土層が挟まれている。このことは数次に渡り海進があったことを示す。大阪層群の地層は、大阪・京都・奈良盆地の丘陵をつくり、台地や平野の土台となっている。大阪南部では下層部が丘陵地に露出している。



2. 須恵器窯

陶器窯跡群の分布をみると、大阪層群上に集中していることが判る。(下図参照 ●●は窯跡)

大阪層群には海成粘土層が露出している地域があり、そこでは須恵器窯の構築が意識的に避けられている。

田辺昭三氏の実験によると、焼成温度が1150度を超えると海成粘土は表面が溶融し、内部が海綿状になるという。(京都大学の清水芳裕教授は、海水に含まれる硫黄が希釈されていれば、必ずしも須恵器の焼成に適さないと断定はできないと指摘している。)

< 丈六大池遺跡 >

東区の丈六大池近くで、100基を超える粘土採掘壙が発見されている。すべての土壌が粘土層だけを掘り込んでおり、砂礫層には達していない。

良質な粘土層を求めて、水平方向に粘土を採掘した状況が観察されている。土壌には、粘土の仮置き、或いは、陶土のねかしの痕跡と思われる例も見られる。



【参考文献】 「堺市文化財調査概要報告」 第3冊 「丈六大池遺跡」 1990

やさしい講座「大阪層群のはなし」 千地万造 2006

「研究調査報告第3集 2002」 大阪府文化財センター 「大阪層群と須恵器生産」 山元 建

クボタ HP 「大阪層群と大阪平野」 大阪市立大学理学部教授 市原 実